

中世以来の歴史を背景に目指す人が育ち輝くまち シビツクプライド醸成で実現する持続可能な未来

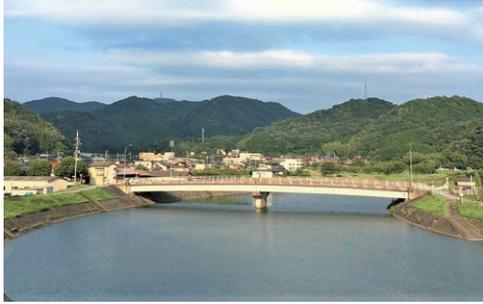
中世の町割が今も脈々と息づく
自然豊かな歴史文化都市

市域北側が日本海に面し、東側を島根県
浜田市に、西側を山口県萩市に、南側を島

根県鹿足郡津和野町、広島
県廿日市市、山口県岩国市
などと接する、島根県西端



日本一の清流の呼び声も高い高津川



市域の中心部を貫流する益田川

のまち・益田市が誕生したのは、昭和27
(1952)年8月1日のこと。旧美濃郡益
田町・小野村・北仙道村・高城村・豊川村・
豊田村・中西村・安田村の1町7村の合併
による市制施行だった。

さらに細かな編入を繰り返した後、平成
16(2004)年には、旧美濃郡美都町・同
匹見町と合併し、新生・益田市が発足。島
根県では最大となる市域(733・19km²)が
確定した。本年度は旧益田市の市制施行か
ら72年目、平成の合併による新生・益田市
誕生から20周年の節目の年度に当たる。

益田は中世以前からの古い地名で、鎌倉
時代から戦国時代末期に至る約400年間、
この地を治めた益田氏(近世以降は長州藩重
臣)の治世下に、その後の城下町としての土
台や文化的な土壌が構築された。地名とし
て古いだけでなく、益田市の特に中世以来
の歴史と伝統の厚みは、令和2(2020)
年度に認定された日本遺産『中世日本の傑作

やまもとひろあき
山本浩章
益田市市長



益田を味わう―地方の
時代に輝き再び―のス
トーリーの内容や、構成文化財など
の多彩さを見ただけでも明らかだ。

周知の通り、徳川幕府が鎖国政策を
取る以前の日本は、地方に拠点を置く武
將たちが比較的自由に、海を通じた世界と
の交易に乗り出すことができた。中国や朝
鮮半島に近い山陰地方西端の益田の地も、
益田氏の積極的な対外政策により、中国山
地がもたらす豊かな木材や鉱物資源などを
基盤に、日本海交易で大いに栄えた。



大正12年に開業したJR山陰本線・益田駅は令和5年に開業100周年を迎え、盛大な式典が催された

海上交通や大河・高津川、益田川など内陸部の水運、さらには諸国と結ばれた街道筋などを通じてもたらされる「人・モノ・コト」が行き交う「交通の要衝・益田」の地は、中世の中国地方における一大文化・情報発信拠点であり、そうした環境は長い歴史を通じ、幾多の優れた人材を輩出する要因ともなった。

また、中世に完成した城下町としての栄華の跡は、近世に向け新たなまちづくりが進められていく過程においても、まちの在り方が完全にリセットされるような開発を免れた。そのため、中世のまち並みの原型（港・城・館跡や周辺の景観、今も健在な中世以来の寺社、街道筋の景観、庭園、絵画、仏像など）を今日まで保つ希少な歴史環境が形成された。そうした中世の原型を保つまち並みは、日本遺産に認定される大きな要因となり、今後の地域活性化に向けての「含み資産」ともなっている。

日本遺産の認定から2年後の令和4（2022）年11月、益田市は「世界歴史都市連盟」への加盟が認められた。それはまさに、益田市が有する歴史の「含み資産」が、国際的に通用するものと認められた証左の一つ

といえるだろう。

世界歴史都市連盟は平成6（1994）年に発足。現在（令和6年11月時点）では66カ国129都市が加盟する、世界的な自治体組織（非政府組織）だ。同連盟の主要目的は「保存と開発という、世界中の歴史都市が直面する課題の解決を図るための情報の交換および共有」などにある。換言すれば、歴史都市としての基盤と資産を守りつつ、いかにそれを地域の活性化に有機的に結び付けていくのかという難しいテーマを、都市同士の国際的なつながりを通して探求し合い、追求していこうとする組織といえる。

日本遺産の認定と同様、世界歴史都市連盟に加盟するには、高いハードルがある。それは例えば、益田市以外の日本の加盟都市が、京都市（世界歴史都市連盟の会長市および事務局設置都市）、金沢市、鎌倉市、奈良市、姫路市、松江市だけという事実からも分かる。

日本には固有の優れた歴史を有する都市が数多くある。だが、世界歴史都市連盟に加盟を認められている都市は、いずれも世界文化遺産あるいはそれに準ずる歴史遺産を保持して、既に世界的な知名度を持ち、その歴史的雰囲気味わうため、国内外の観光客が頻繁に訪れようとする都市ばかりだ。

「歴史都市としての益田市の発信の状況は、世界歴史都市連盟に既に加盟している日本の他の都市に比べると、まだまだこれから――

というのが、正直なところだと自覚しています。しかし、逆に言えば、現時点では国際的な知名度で劣る益田市が、そうした日本を代表する歴史都市の一員になったという事実は、今後に向けた大きな「可能性」を認められたものとも考えております。

益田市では日本遺産への申請前に、令和元（2019）年度から『益田の歴史文化を活かした観光拠点づくり実行委員会』を組織し、日本遺産の認定後を想定した、各種の取り組みを計画しておりました。実際に認定を頂いてからは、益田市の豊かな歴史文化を活用した地域振興への取り組みに関し、観光拠点づくり（※旧郡役所の建物を活用した、益田市立歴史文化交流館「れきしーな」の整備など）や、益田の歴史を多角的に味わう散歩コース、体験スポットの整備など、各種の施策・事業を推進してきました。



その過程で令和4年、さらに世界歴史都市連盟の加盟が認められたことは、コロナ禍が明けたこれからの時代の観光振興、地域振興に非常に大きな追い風になる出来事だったと考えております。

現在はさらに、豊かな歴史資産を基盤とする観光による地域活性化を目指し、市内三つの観光協会（※平成の合併前から継続する益田市観光協会、美都町特産観光協会、匹見町観光協会）との連携による『益田市版・地域DMO』の設立と観光庁への登録を目指し、準備を行っています」

そう語るの、山本浩章益田市長だ。山本市長は大学を卒業後、民間企業での



旧郡役所の建物を活用した益田市立歴史文化交流館「れきしーな」は、歴史のまち・益田市の拠点施設の一つ

勤務を経て、平成23（2011）年8月に益田市議会議員に当選。さらに、翌平成24（2012）年7月に実施された益田市長選に出馬して当選。市長就任から本年（令和6年）度で4期13年目を迎えている（※取材は令和6年10月2日）。

地域DMOの設立効果と 全国山城サミット開催への期待

益田市版・地域DMOについて、益田市では当初、令和6年9月の登録を目指したが、取材時には令和7年度内の登録へと修正されていた。そして登録準備のため、益田市では令和4年10月に市DMO設立協議会を設置するとともに、市内を訪れる観光客の詳細な分類や動向に関するデータを作成。一方では、市内で開催されてきた各種イベントの現状の洗い出し、観光関連団体の重複などによる無駄の排除など、緻密なデータの整理と各種の合理化を実施し、効果的かつ「稼げる観光事業」推進のための努力を鋭意重ねてきた。

「併せまして、益田市特産のメロンやユズ、シャインマスカット、トマトなどの農産物のブランド化や、豊かな自然環境、日本遺産などの歴史を生かした地域資源・地域財産の観光資源化を図るとともに、誘客のターゲットを明確にすることによって、より効果的な情報発信の在り方なども模索



中世以来の歴史文化が蓄積する益田市のまち並みを巡るには自転車がついたり。益田市は「自転車によるまちづくり」を推進中!

しているところですよ」と山本市長。

そういう意味合いからは、令和6年11月16日（土曜）・17日（日曜）の両日に開催された「第31回全国山城サミット益田大会」は、全国の山城ファンという明確なターゲットが基盤となる、全国レベルの歴史観光イベントとして、その成果が非常に注目される。

実は開催日が本稿締め切り日（令和6年11月15日）の直後なので、成果の詳細な分析結果は、現時点では把握できていない。だが、全国山城サミットは、全国の山城跡（戦国時代以前に築城された山間部の城跡）が存在する市町村において、持ち回りで開催される人気の高い恒例の歴史イベントだ。毎回、山城ファンや歴史マニアなどが大挙して詰めかける様子などが、全国ニュースとして

益田市

市 政 ル ポ

(島根県)



山城サミットに合わせて実施され大いに盛り上がった「中世益田ビッグフェスタ」(岩国藩鉄砲隊一斉射撃の実演)



日本遺産を体感する「中世益田フェスタ2023」の模様(桃山時代創建の国指定重要文化財の本殿が伝わる染羽天石勝神社境内)

市域の大半は林野だ。特に平成の合併で加わった旧美都町・匹見町地区は95%以上が山林に覆われており、豊かな自然に恵まれている半面、過疎の進みつつある地域も少なくない。
そんな益田市

歴史や伝統文化に裏付けられた、しっかりとした都市的基盤を背景とするシティプロモーションなどだ。
だが、それ以前の話として、益田市の持つこうした豊かな自然と



「ひとが育ち輝くまち益田 夏フェスタ(ひとが育つまち益田フォーラム)2024」は市内に立地する島根県芸術文化センター「グラントワ」で開催

発信される。歴史都市・益田市の発信にも大いに効果を上げることだろう。
なお、全国山城サミットの1回目が開催されたのは、『天空の城』の異名で知られる竹田城跡を有する兵庫県和田山町(現朝来市)だった。サミットに参画している加盟自治体は、令和6年11月現在で108団体・172城となっており、益田市(七尾城跡)は平成19(2007)年に加盟を果たしている。
全国山城サミットはまた、単なる観光イベントではない。山城跡が残る全国の市町村および関係団体などが、情報交換や親睦・交流を深め合いながら、山城跡の保存方法や観光資源としての山城を活用した地域の

活性化を図りつつ、潤いのあるまちづくり、持続可能なまちづくりを協働で進めることなどが主要目的となっている。その点において、世界歴史都市連盟における「趣旨」のローカル版的な性格をも併せ持っており、益田市版・地域DMOの構築を始め、歴史資産を生かした観光振興を今後強化していく上で、いろいろな意味での貴重なデータが集まることが期待される。
このように、中世以来の歴史文化に、近代都市としての質量を兼ね備えた益田市は、現代においても、周辺地域(島根県西部の広域圏)における文化・経済・医療など、エリアの人々の生活を支える基盤・機能を担う中核的な都市としての役割を果たしている。
また、益田市の現在の面積733・19km²は、島根県の総面積の約10%を占めるも、

最大の地域課題は、一部の大都市圏以外の全国の都市と同様、人口減少と少子化の抑制だが、益田市では現在、『ひとが育ち輝くまち益田』をスローガンとする「第6次益田市総合振興計画」を基盤に、積極的な地域活性化施策を実施。それにより、人口減少や少子化の抑制策を多角的に実施すると同時に「人口減少や少子化が進んでも魅力的なまちづくり」を多彩に展開している。
その魅力的なまちづくりの軸となるのも、日本遺産



ワーケーション需要も受け入れる民間の複合シェアオフィス[NALU]の共用スペース。起業希望者向けセミナーなども随時開催している



令和5年7月2日に開港30周年を迎えた萩・石見空港は、東京と益田市を90分で結ぶ空の玄関口



全国で唯一、現役空港の滑走路を走るマラソン大会「萩・石見空港マラソン」は、益田市民と空港の絆の深さを改めて感じさせるイベント

歴史・文化的環境が溶け合った都市的魅力は、市内に空港（萩・石見空港）が立地している利便性などと相まって、ワーケーションや2拠点生活志向のある人々、さらには移住・定住、移住先での起業などを検討する、時代の流れに感度の高い人々の関心をも、既に集めている。

中世と現代のハイブリッドの魅力で 図る「地方の時代」再び

「例えば、萩・石見空港から益田市の中心市街地へのアクセスは、車で10分前後と非常に便利です。朝夕2便の定期航路がある羽田航路、つまり東京（羽田空港）からは90分前後で益田市の市街地に到着します。大阪（伊丹空港）と結ぶ航路は、東京便と違

い、現在のところ夏の季節運航（8月の5日間）のみとなっていますが、こちらは大阪から60分前後で益田の中心市街地に到着します。

近年、特に東京方面からのワーケーション需要や、2拠点生活の対象などとして益田市が注目を集めているのも、空路による東京からのアクセスの良さが、大きな要因になっていると思われま

す。また、市域を貫流する高津川は水質日本一とされ、日本海から水揚げされる生きのいい魚介類や、米、特産のメロンやユズ、シャインマスカット、トマトなどの新鮮な農産物と合わせ、近年は地方都市で飲食関連の起業を目指す若い世代の方たちの注目も集めています。

そうした動きの中から一つの特徴的な事例としてご紹介したいのは《高津川リバーピア》というクラフトビールの醸造所です。

工場は高津柿本神社の門前町に建つ古民家（旧料亭）を活用しており、醸造所を立ち上げた代表の方は、東京で15年間、国家公務員を務めておられた女性です。この事業は、総務省の『関係人口創出プログラム』に採用された企画で、令和2年、高津川の清

浄な伏流水や高品質の農産物に着目されたその女性が、クラフトビールを造るのに適したまち、自然・歴史・文化的環境などのバックグラウンド（※ストーリー性）も踏まえた適地として益田市を選び、企画を立案し、



高津柿本神社から見る直線的な参道は圧巻

採用されたのです」（山本市長）

高津川リバーピアの公式サイトによると、代表の女性は公務員生活の傍ら、かねてよりシニア世代が生き生き働ける場所づくりを模索していた。その結果として益田市の持つ独自の環境に着目。益田市で地域の人々と共に、高津川の伏流水や「地域の特産品（マスカットなど）」を生かしたクラフトビール造りを企画したのだという。

ちなみに、市長の談話にもあった醸造所近くの高津柿本神社（高津町）は、あの高名な万葉歌人・柿本人麻呂（人麿）を祭神とする古社だ。人麻呂は晩年に至り、石見国の国府に国司として赴任、当地で没したとさ

益田市

市 政 ル ポ

(島根県)



益田氏ゆかりの古刹・医光寺に伝わる、雪舟の作とされる庭園（雪舟四大庭園／国指定史跡および名勝）



雪舟を益田に招聘(しょうへい)した益田家中興の祖(15代目)にして七尾城主・益田兼堯の像

れる。人麻呂の「終焉の地」と伝わる場所は複数あるが、益田川の河口にかつて浮かんでいた鴨島は、古来、その有力な地とされ、今から1300年ほど前には既に、人麻呂を祀った柿本神社も鴨島に創建されていたと伝わる。しかし、万寿3(1026)年に発生した大津波で柿本神社は流され、鴨島とともに海底に沈んだため、後年、益田市高津地区(松崎)に高津柿本神社として新たに建立。さらに延宝9(1681)年に現在地に遷され、現在の社殿もその際に改めて建立されたと伝わる。

現在地はもともと高津城のあった場所で、周辺は『島根県立万葉公園』として整備され

ている。さらに益田市内にはもう1社、人麻呂の生誕地伝説のある戸田柿本神社(戸田町)もある。

市内には、画聖の尊称を持つ絵師・雪舟にまつわる文化財や逸話なども、豊富に伝えられている。中世を通じて益田の地を治めていた益田氏の15代目当主・益田兼堯(山城サミット会場の七尾城城主)の招きを受け、15世紀末ごろに益田に到着。古刹・医光寺(当時は崇観寺)の五代目住職となった後、市内の東光寺(現・大喜庵)に移り、87歳の生涯を閉じたとされる(以上の経緯には諸説あり)。

このように中世以来、連綿と育まれてきた益田の地の歴史的土壌からは、近代以降に限っても、徳川夢声(活動弁士・漫談家・作家・俳優)、秦佐八郎(梅毒の治療薬サルバルサンの開発で知られる細菌学者)、右田アサ(わが国の女性では初の眼科医)など、近代史上の偉人と呼ばれる人々が輩出

されてきた。益田市ではこうした歴史も一つの地域的特徴と捉え、「ひとが育つまち」というスローガンをシティプロモーションのキャッチフレーズなどにも使っている。

「益田市では現在、『つろうて』(みんなで連れ立って)という方言を合言葉に、教育を学校任せにせず、地域総がかりで大人が子どもたちに向き合い、毎日のあいさつを含めて積極的に対話を行い、みんなで子育てしていこうとする『つろうて子育て』という運動を展開しています。それは、幼少期から高校生までの子どもたちが大人に臆することなく、自分の人生を能動的に生きていく、自発的に育っていくことのできる力を育む『ライフキャリア教育』の一環です」

取材を通じ、益田市で出会った子どもたちが100%の確率で、自分からあいさつをしてきてくれたことに、実は非常に強い感銘を受けていたのだが、それは故のないことではなかったのだ。

さらに前出の高津川リバービアの事例が象徴するように、近年、益田市で起業したい(※換言すれば益田市で成長したい)、暮らしてみたいと考える外部の若者や子育て世代が、徐々に増えつつあるという事実。それもまた、中世以来培われてきた歴史文化の積み重ねが醸成する土壌、すなわち人を呼び、育む「まちの底デカラ」の故ではなからうか。

(取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和6年10月2日)